

末黒野

すぐろの

8月号

(通巻888号)



隣席

森清堯

八重桜八重雨の夜となりにけり
急磴の下見返れば花の雲
子ら走る園の八橋春の泥
芹の香や小流れへ子ら踏み入りて
一尋の間の隣席春寒し
うすうすと湾奥の塔四月尽
紅白を連ねつつじのつづら道
山壁のけぶるひと筋懸り藤
柿若葉日照雨のあとの日のかから
夏燕光のをどる洗堰
いつまでの外出自粛若葉冷え
丘上の暖地老鶯こだまして

瑞声

首夏

黒滝志麻子

(顧問)

窓外のものみな親し木の芽張る
オルゴールの鳴り出す時計春の地震
春愁や砂きしませて渚まで
五月来る流れの底の魚の影
子と犬の転げて来たり首夏の土手
花棕櫚や白き波の秀波を追ひ
樹下涼し流るる水の軽き音
道それて踊子草の群に会ふ

甲矢集

配列は音順(当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ)

聖五月

菅野日出子

あるなしの風にはらりと紫木蓮
囀や供物をねらふ鴉どち
電子辞書に夫の匂みつけ亀鳴けり
躑躅燃ゆちまたの病魔払はむや
電線に餌を待つ二羽の巢立鳥
コロナ禍の去るを祈るや聖五月
昼寝覚め又感染におびえけり
夕焼の美しとの電話友こひし
葉隠れにビースの如き実梅かな
放牧の牛ゆつたりと薄暑光

田 植

田中臥石

重行忌桜も散つてしまひけり
海棠の睡れる花や冠木門
新天地求めてゆかむ白躑躅
紫雲英咲く老いて引退為すべきや
苗床へ散水日矢の虹を撒く
早稲晩稲水遣る苗の違ひ床
連休は田植真昼の海ひびく
田植機の入り来夕日の冠木門
田を廻り浮き苗を地へ植ゑ戻す
路を摘む屋敷祠へ黙礼す

猫だまり

岡野里子

源平の桃の並木や日を返し
日溜りの傾りの杉菜猫だまり
祖師堂の青き反り屋根花吹雪
花の塵走り子の声転がりて
青銅の屋根の白雲夏隣
間遠なるバスのダイヤや夏つばめ
薔薇咲くや花壇賑はふその中に
父と子の芝に大の字若葉風
洋館の朽ちたる門扉桐の花
石楠花や道標のなき岨の道

おほらか

森清信子

鶯や暁を待たずにひとしきり
のどけしや遅れがちなる花時計
丘陵や風のなでゆく芝桜
小綬鶏の案内の里曲めぐりかな
丘上の団地に籠り百千鳥
異人館遠き汽笛に春惜しみ
ぼうたんやおほらかなる句詠みたくて
薔薇への眼差のまま仰ぐ像
洋館の大き丸窓薔薇の門
グラウンドに蜘蛛の子散らし雷雨急



乙矢集

配列は音順(当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ)



初 鯉 齊藤マキ子

ゴム風船息がまあるくなりにつけり
薫風や百の窓ある小学校
金婚へあと二年なり初鯉
筍流し吾が老骨のきしむ音
本捨ててまた本を買ふ薄暑かな
河港跡の石段夏つばめ
花桐やこの世に名前もらひし日

立 夏 加藤静江

麦の穂 堺 昌子

落椿花の重さを掌に受けて
鳶の輪の上の鳶の輪涅槃西風
淡き色重ね膨らむ弥生山
夏立つや水満満の金盃
堰越の水音豊か五月来る
微笑の羅漢の細目夏きざす
非常口開くや光と若葉風

犬と子に花散る辻や道祖神
けるころと蛙鳴く田や蒼き空
菖蒲咲く台場公園浜の風
子等の声とどく社やラベンダー
樟若葉学校休みと子等の声
早咲きの梅の実の数遊歩道
麦の穂の出揃つてをり風の道

竹落葉 高木邦雄

夏はじめ 今村千年

芽柳の彩育むや小糠雨
春泥やかつて武士馳せし道
漫ろ行くガス灯の街月朧
マロニエの花や並木の朝日影
菖蒲湯に憂さの解け行く夕べかな
竹落葉散り敷く谷戸の黙深き
青あらしパンデミックの水の星

駅頭の人は疎らや夏はじめ
ゆくりなく薔薇の香りや裏通り
学童の声なき校舎花は葉に
閉ざされし町の図書館紙魚走る
二人掛けのベンチにひとり缶ビール
会釈する夏のマスクは誰ならむ
美しき夏のマスクは隣の子

蝮の道 長尾タイ

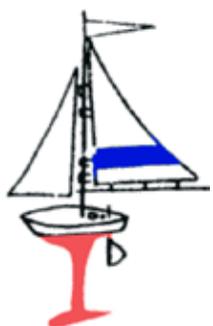
五月 及川照子

夢の旅探す古地図や目借時
八十路過ぐ行方の見えぬ蝮の道
燕の巣繕ふ土の黒黒と
菊根分世代を紡ぐ考の鉢
切り株は一人の世界若葉風
年金日家苞に摘む小判草
自肅てふ隔離の五尺街薄暑

うなじ吹く風のささやき五月来ぬ
五月晴帆綱を鳴らす風の音
今年竹親をめざして皮を脱ぎ
象潟の旅の思ひ出合歓の花
花苔へ光ひと筋大樹林
桑の実や絹街道てふ昔みち
麦笛の彼方に遠き故郷かな

青炎集

森清堯選



横浜 上月智子

切立ての竹の花活け山つつじ
藤房や袋小路の風途絶え
春しぐれ軒端を借りて傘借りて
昨夜の雨春筍土を押し上げて
鎮守社へ賽銭少し遅桜
行く春や四つ葉を捜す庭の隅

横浜 渡辺富士子

初燕水面掠むる瑠璃の泡
突出しは独活の酔味嗜やカウンター
春の海ままに大波寄せ来たり
物事を斜に見る癡揚雲雀
鈍色の海の日暮や松の芯
緑さす樹々の帳や十重二十重

横浜 池乗恵美子

街病めど辛夷の空や子等の声
葉にこもる沈丁の香や小糠雨
永き日の修行のごとき籠りかな
散る桜光となりて風に乗り
終息の見えぬ疫禍や花は葉に
黙淀む駅周辺や街薄暑

横浜 本間せつ子

蒲公英のぼぼぼぼぼと土手清か
薬局の長き行列花の雨
影落とす一朵の雲や座禅草
光満つ園の盛りのつつじかな
暗渠へと逃げ込む真鯉初夏の風
えごの花散るは淡雪降るごとく

川崎 平澤 侃

たんぼぼや遠くにありて黄を増せり
地虫出づキャッシュカードの磁気不足
花水木日本国籍取得せり
ふうらこや波郷の句境考へる
脱走の亀の小走り花ゑんど
断捨離を拒む回想鳥曇

横浜 岡本ヨシエ

時の疫をひととき忘れ花の雲
むすび手の幼子と母花の下
雨上りの真青なる空花水木
二米はなれ会釈や花つつじ
しづかなる窓辺の光花いばら
マロニエの花や木陰に独り言つ

横浜 和田慈子

渴き癒すごとく花種まいてをり
山藤の揺るるむらさき切通し
休校の続く学園亀鳴けり
擦れ違ふ顔みな春のマスクかな
行く春や減りゆくものに骨密度
夏きざす曇る眼鏡を拭ひては

横浜 大霜朔朗

入り彼岸自立つ所の点火器具
ウイルスに関心殺がれ山椒の芽
名を恥づる如きの深紅木瓜の花
木登りの少女けらけら春の風
クラス会は運者ばかりや葱坊主
天満宮の絵馬の変色蝸牛

横浜 飯田久美子

常ならぬことは世の常花の散る
春風や単線駅に待つも良き
園児らの声突き抜けてチューリップ
御朱印を受くや飲み干す五香水
幸せは崩れやすくて白牡丹
薔薇を剪る四十一手の詫び言葉

横浜 岡美智子

蝶結びほどけて蝶の飛び立てり
あきらむる術見つからず夏に入る
つる草の螺旋伸ばして初夏の風
こぼれてもなほ匂ひけり花蜜柑
牡丹の重なり散りぬ昨夜の雨
励ましを交はず縁や聖五月

耕 土 集

岡野 里子



不自由と自由のあはひ春夕焼
入口の手指消毒夏に入る
海風の巡る薔薇園足早に
鼻歌のやうに羽音や新樹光
プランターの幼虫育つパセリかな

横浜 大内 由紀

霧や気急く過ぎる遊覧船
不意の風弾みつきたる手毬花
山里も富士も隠して樟若葉
青葉騒会話無用の遊歩道
野あやめや信濃路しのぶわが庭に

横須賀 久保寺眞佐子

白蓮の命ささげて空映し
夏の満月我百歳と八ヶ月
青天の生命輝く若葉かな
雛五羽の大きく巣立つ燕かな
梨農家の粒を摘みぬ夏の空

川崎 宮地 静雄

啓蟄や錆びたる鎌の納屋の隅
住みし地はどこも古里初桜
灯台は真白が似合ふ鳥雲に
山吹やかたて防人抜けし森
つつじ燃ゆ児ら通学の道の脇

横浜 和田 啓

藤椅子にある考の音妣の音
夕立の水玉模様沈下橋
若葉風後ろめたさの夕散歩
縞模様夜の光の簾こし
密いふ言葉をなぞり青葡萄

町田 中野千代子

春風へエンジン軽き新車かな
緑立ついくたびポスト見にゆかむ
久々のミシンや春のマスク縫ふ
紫蘇入りの餃子や進む缶ビール
薔薇園に響く亭午の汽笛かな

横浜 津野 桂子

三叉路の渋滞しげく春埃
持てるだけ買ふ産直の春キャベツ
はんなりと京の弁当春の雪
華やかにライト浴ぶるも花淋し
春泥や野を駈くる駒息粗く

横浜 与田 幸江

心地よき甘口ワイン春の宵
春の庭一つ一つに立つ名札
ミモザ咲く橋の袂の美容院
スイッチの切替忙し春炬燵
小流れの音に消えたり春の雪

横浜 杉山くみ子

子等と剥く莢豌豆や声弾け
たまに会ふ素直な笑顔子供の日
母の日の花に添へたる句集かな
松籟や五月の雨滴輝やかす
この川は町のシンボル桐の花

横浜 岩崎 藍

駅前小菜の花畑乳母車
鶯のいつもの朝や谷戸の空
ウォーキング茅花流しの土手に沿ひ
青鳶やシンメトリーに這ひ上がり
雷鳴に猫の戻り来三日ぶり

横浜 村田 敦子

竹の皮脱ぐや小さき音たてて
御符揺るる寺深閑と大牡丹
子鴉の尾を振り歩む鉄路かな
サクサスの音色に遊ぶ若葉風
もじばなの我を通し抜くねぢりかな

横浜 喜田 君江

薄紅の童女の頬や花水木
麗かや天に胸張る風見鶏
春暑し話し相手は良人のみ
人影の動かぬ町や鯉幟
老鶯の思はぬ近き朝厨

横浜 秋山 文子

屋根を越す櫻若葉や雨上り
路を剥く黄緑の香を走らせて
葉桜や角なき空の広ごりて
雨の糸解れてやはき菖蒲かな
若葉風幼児にもどる童歌

横浜 小池 桃代

日脚伸び明き厨の古時計
未央柳静かに揺るる日暮れかな
春風やスカーフ灰と去年の香
ふと猫に見据えられをり春愁
諦めと悟りのあはひ牡丹散る

横浜 石田 朝子